創立60周年を迎え グローバル企業化を強く意識

一丸ファルコス

安藤芳彦社長

化粧品・医薬部外品、健康食品分野の機能性原料メーカーである一丸ファルコスは、創立60周年の区切りの年に合わせてこのほど、社名表記と企業ロゴを刷新した。安藤芳彦社長は、社名表記や企業ロゴの変更について、「国際展示会など海外でのビジネスでは数年前から使用してきた」デザインであることを明かし、国内も統一することでグローバル企業としての歩みを進める。

今年4月に増設したN4棟

同社の最近10年間を振り返ると、2011年に大阪営業所を開設し、真正工場は14年にN1棟（化粧品原料の製造工場）・N2棟（原材料専用倉庫）、16年にN3棟（製品倉庫）、19年4月にN4棟（化粧品原料の製造工場）と約4年間で生産棟を4棟増設した。

今年6月には、N4棟の新設にともない旧工場を改装して、小分け・充填・包装業務を受託できる体制を整え、新会社・㈱エクストラクト（本社＝岐阜県）を設立した。安藤社長が代表を兼務する。

安藤社長は、日本製コスメの需要拡大にともない「国内取引先の多くは、品質はもとより、安定供給の観点から国産原料を求めるようになっている。当社としても供給責任を果たせる体制を強化する形で増設を進めてきた」と話し、エクストラクト社に関しては「取引先であるOEM／ODM会社の要望に応える形で設立した。取引先の依頼に対応していく」と語った。従業員約40名体制で稼働を開始している。

原料レベルでの「環境・社会貢献」に対応

同社は平均して毎年2～3品の新規の機能性原料を発売しており、開発原料は天然植物由来のものを中心に約1000品目にのぼる。

そのほとんどは自社開発品だが、常に国内外30前後の大学や研究機関と連携しており、「それら研究成果の産業化を目的とした共同開発にも取り組んでいる」（安藤社長）。

近年の原料トレンドに水を向けると、安藤社長は、プラスαの価値が求められている」と話す。

かつては日本で好評だった原料を海外に紹介していくという流れだったが、「近年ははじめから海外向け製品に位置づけて開発を進めることも増えた」という。

また、最近ではそうした海外向け製品を中心に「原料の環境・社会に与える影響に関する問い合わせが増えている」と述べ、こう続けた。

「欧米のグローバル大手企業を中心に、原料に対して環境・社会貢献価値を求めるようになってきている。当社としては、世界的な流れとして捉え、原料の有効性や新規性だけでなく、環境・社会貢献を切り口にした新しい原料の開発や既存原料の見直しも並行して進めている」

一例として、アロエベラなど宮古島産や沖縄産の素材を用いた製品でNPO団体を通じてサンゴ礁保全などの環境活動支援につながる「グリーンビューティ」プロジェクトを立ち上げているほか、CBD（生物多様性条約）に対応する原料としてインド産ニーム葉から抽出したエキス（ニームリーフリキッドB）などをラインナップしている。

新会社を設立し小分け・充填の受託サービスを開始

小分け・充填、包装業務を請け負うエクストラクト社の設立について、安藤社長は「あくまでOEM／ODM会社のサポートの域を出ない」と話し、次のように語った。

「N4棟新設にともない、旧工場を改装して小分け充填、包装できる体制を整え、中国・アジアを中心に日本製コスメの人気は依然として高く、大手を中心に国内化粧品メーカーも海外での生産から国内生産へシフトしてきている。インバウンドは今年に入って多少落ち着いてきたようだが、国内メーカーは、海外での成長拡大に向け、これまでの海外生産分も含め国内OEM／ODM会社へのアウトソースが進むと予想される。エクストラクト社では化粧品の開発・製造の周辺サービスを提供できる体制を整え、取引先をサポートしていきたいと思っている。受注状況をみながら生産能力の増強なども視野に入れていく」（安藤社長）

PHARCOS

新・企業ロゴ

対象原料の配合でサンゴ保護活動の支援に

インド産ニーム葉（写真）はCBD対応原料として展開